

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：41201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26350807

研究課題名(和文) ジェンダーとスポーツからみた女子ラグビーをめぐる文化人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological Investigation of Gender in Women's Rugby

研究代表者

原 英子(草場英子)(HARA, Eiko)

岩手県立大学盛岡短期大学部・その他部局等・教授

研究者番号：80180991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：女子ラグビーについての文化人類学的研究を主に以下の点から行った。第1に国内のラグビースクールの状況や国体に向けた各地の女子ラグビーチームの取組、及びルーマニアと台湾の状況についてインタビュー調査と資料収集を行った。第2に女子スポーツをめぐる環境の変化に注目した資料収集を行った。これには主にオリンピックや国体等の女子スポーツの進出の歴史や国内外のスポーツ関連博物館等で資料を収集した。第3にスポーツのジェンダーイメージに関する調査を行なった。これには現状を知るためのインタビューとアンケート調査、及び過去の文献等のジェンダーに係る表現に注目した資料収集を行った。こうした資料を基に分析と考察を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2016年のオリンピックで女子ラグビーが導入された。これへの参加に向け、全国各地で女子チームの結成と選手の募集があった。オリンピックでの競技や種目の男女差解消のため近年、女子競技や種目の導入が増加している。女子の活躍はスポーツのジェンダーイメージを変えつつある。女子選手は何を契機に女子が参加していなかったスポーツを始めるのか。種目による違いや国別の違いはあるのか。女子ラグビーの歴史をはじめとする女子スポーツの歴史とスポーツのジェンダーイメージの変化を明らかにすることは、女子スポーツへの社会的関心を高め、女子のスポーツ環境を向上させるひとつの契機創りに寄与できるという社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：I conducted an anthropological investigations into women's rugby from mainly three areas. 1) I gathered data on how girls got opportunities to begin rugby in Japan, Taiwan and Romania. I found many families of women's rugby players also have/had other rugby players. Some cases passed rugby from generation to generation, for example from grandfathers and fathers to granddaughters. 2) I also considered women's rugby from the historical changes in women's sports circumstances; particularly I took note of the history of the Olympic Games, Japanese National Sports Festivals, and sports museum exhibitions in Japan and foreign countries. 3) Finally, I observed differences in gender images of sports in other countries. Women's sports images have emerged from female winners in Olympic Games and other big events. Through these investigations, I documented the process of historical change in the gender images of women's sports.

研究分野：文化人類学

キーワード：女子ラグビー ラグビー ジェンダーイメージ 近代スポーツ

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1)2012年の英国でラグビーワールドカップ（15人制）が開催され、この大会での日本の躍進は社会的な注目となった。そして2019年にはラグビーワールドカップが日本で開催されることが決まっており、日本のラグビーのより一層の活躍が期待されていた。

(2)2016年のリオ・デジャネイロオリンピックでは、ラグビーの男子7人制とともに、女子ラグビーが、7人制で初めて正式種目として導入されることが決まっていた。オリンピックに向けた女子のナショナルチームづくりがおこなわれていた。

(3)同じく2016年の国民体育大会岩手県大会から、男女ともに初めて7人制ラグビーが正式種目として導入されることが決まっていた。

(1)のラグビーワールドカップの日本での開催により、国内で人々のラグビーへの関心を高めようとしていた。(2)オリンピックに向けたナショナルチーム結成のために、(3)国民体育大会へ向けた日本各地の都道府県ラグビー協会での既存の女子ラグビーチームに加え、新たな創設とチームの強化が行われていた。また、女子にとっての初めての正式競技ゆえに、選手の募集も行われていた時期であった。

研究の開始の時期は、男子ラグビー、女子ラグビーともに国内外のビッグ・イベントへ向けた動きが各地で活発になろうとしていた時期であった。

2. 研究の目的

ラグビーは、1820年代のイングランドのパブリック・スクール、ラグビー校で発祥したことからラグビーと名付けられたとされている。そこでは男らしい勇敢さをもったジェントルマン教育の最適なスポーツと考えられていたことが、ラグビー校出身の作家トマス・ブラウンの小説に書かれている。またその勇敢さ、仲間への役割意識の強さは軍隊と結びつきを強め、男性のジェンダーイメージと結びつきやすいスポーツでもあった。本研究は、そうした男性イメージの強いスポーツがいかに女子のスポーツとしてとりいれられ、発展していこうとしているのかという点に注目した。

研究は、主として次の3点から行った。

(1)女子がラグビーを始める契機とは何かを考察することを目的とした。

(2)女子ラグビーはどのように発展してきたのか、その歴史的過程を女子スポーツの発展と組織化のなかから考察することを目的とした。

(3)ラグビーのジェンダーイメージについて①時代的変遷、②国内外のスポーツのジェンダーイメージの差異に注目した。

3. 研究の方法

本研究は、女子ラグビーというスポーツを文化人類学的な視点で考察してきた。そのため、インタビュー調査を主体に、アンケート調査、文献やインターネットをつかった文字資料等の収集等をおこなった。

(1)インタビューは、主として以下の人たちにおこなった。①国内のいくつかのラグビースクールの生徒・児童とその両親、コーチ、役員といった人たち、②高校や大学の女子ラグビー部員やコーチ、その親等、③地域の女子ラグビーチームのコーチや部員とその親等、④ルーマニアナショナルチームの事務所員や台湾ナショナルチームの役員と選手など。

(2)地域のラグビースクールの発展の歴史とそこにおける女子の参加に注目した地域の資料収集をおこなった。

(3)日本や世界のラグビーやスポーツから女子ラグビーや女子スポーツを位置づけるため、国内でのアンケート調査を実施した。

(4)国内外のラグビー博物館やラグビー展示室をはじめ、サッカーや野球といった各種競技の博物館、総合的スポーツ博物館を訪問し、資料を収集した。

(5)ラグビーに関する日本への導入初期の指導書や大学・高校のラグビー部史、小説、報道記事や雑誌、漫画等の文字や絵画資料を収集した。

(6)IOC (International Olympic Committee) やワールドラグビー等世界に発信されているインターネット情報、日本国内でのラグビーに関するインターネット情報等のデジタル資料の収集をおこなった。

これらの資料を中心に、分析と考察をすすめた。

4. 研究成果

(1)ラグビーを始める契機に関する研究

台湾台北市の小学校のラグビーチームでおこなったアンケート調査を、日本の岩手県釜石市でおこなったアンケート調査と同じ項目を中国語に変えておこない、日本と台湾の小学生の比較をおこなった。その結果次のことが分かった。釜石市と台北市の小学生チームでの女子メンバーは少ないが、彼女たちの上の世代の家族にラグビー競技経験者がいるという共通点がみられた。特に釜石の場合、女子選手全員が祖父もラグビー競技者であった。またほとんどが父親もラグビー競技者であった。こうした家族で世代を超えてラグビーに取り組む傾向は男子児童にも

みられた。ラグビーというスポーツに家族の世代を超えた継承が認められ、特に女子にはそれが強くみられた(原 2016;73-78)。

これは岩手県釜石市の中学生に対するアンケート調査をおこなった結果と比べると、その特徴がより顕著になる。すなわち、小学生からラグビーに取り組んでいる者は、親、兄弟にラグビー経験者や現役の競技者がいる場合が多かった。一方、釜石市ではラグビーの試合のために毎年中学校で臨時のラグビーチームがつくられており、そこへ暫時的に入部をし、普段はほかの競技をしている中学生たちがいる。この暫定的ラグビーメンバーの中学生の場合、親兄弟がラグビー経験者である者は少なく、むしろ友人との関係で臨時にラグビーをしている場合が多い傾向がみられた(原 2014;37-42)。

これらの結果を比較すると、ラグビーを始める者は男女にかかわらず家族にラグビー経験者がいることが大きな影響を与えるが、友人との関係もラグビーをする契機となることが分かった。

チームの半数が女性部員で占められている石川県のラグビースクールを調査した。その結果、ここではコーチが中心となって自分の娘たちを中心にラグビースクールに入れていることが分かった。つまりここでも、ラグビーに熱心な世代を超えた家族の存在が、女子がラグビーをはじめ大きな契機となっていることが明らかになった(HARA 2018;49-57)。

(2)女子ラグビーはどのように発展してきたのか、その歴史的過程を女子スポーツの発展と組織化のなかから考察した。

オリンピックにおける女子種目の増加と女子選手の増加の歴史的変遷に注目した考察をおこなった(HARA 2018;49-57)。中でも国際オリンピック委員会 (IOC) が 1991 年に、オリンピックの新スポーツの導入には男女の種目をとりいれるという決定をおこなって以降の女子競技は、日本選手が活躍した競技では、今では女子もおこなうスポーツとしてイメージされている競技が少なくない。

ラグビーのオリンピックへの導入は 2010 年に決定し、2016 年のリオ・デジャネイロオリンピックから男女ともに取り入れられた(HARA 2018;49-57, 原 2019;6-7)。

しかし女子ラグビーの試合の歴史は意外と古く、英国やニュージーランドでは 19 世紀後半にはすでにおこなわれていた。組織化は男女での差が大きく、男子のラグビーの組織化はイングランドで 1871 年以降始まるが、同じイングランドで女子の組織化は遅く 1980 年代であった。女子のラグビーワールドカップは 1991 年から開始されている。日本では女子チームの発足は 1980 年代であった(原 2019a;6-7)。つまり、女子がラグビーをすることとそれが組織化し世界的なビッグ・イベント化することには時間的な隔たりが見られた。むしろ、世界的なビッグ・イベントに参加するために組織化し、チーム作りが行われている面がみられた(原 2019a;6-7)。

(3) ラグビーのジェンダーイメージについて①時代的変遷、②国内外のスポーツのジェンダーイメージの差異に注目した。

①ラグビーのジェンダーイメージについて小説やラグビー指導書、漫画、ドラマ、スポーツのビッグ・イベント等でナショナルチームの活躍等に注目し分析をおこなった。その結果、ラグビーに関しては、発祥当初の頃より、男らしさのイメージをもつスポーツであることがわかった。またオリンピック等でナショナルチームが活躍することで、漫画やドラマ等が作成され、そのスポーツのジェンダーイメージに影響をあたえていることがわかった。

②ルーマニアのブカレストと日本の盛岡市でスポーツに関するジェンダーイメージのアンケートをおこなった。それぞれ女子イメージの強いスポーツ、男子イメージの強いスポーツの名称を書いてもらい、結果の上位 4 位までを比較した。その結果、男女ともに日本とルーマニアの 1 位、2 位のスポーツが共通していた。すなわち女子においてはテニス、バレーボール、男子ではサッカー、バスケットボールであった。日本で男子のスポーツイメージのある野球は 3 位でバスケットボールのほうが上位を示したのは、調査をおこなった盛岡市でバスケットボールチームのプロ化が話題になっていたことの影響等が考えられる(HARA 2019;69-70)。

②のアンケート結果において①の時代的変遷についてみると、ラグビーはルーマニアで男子のイメージの強いスポーツとして 1 位のサッカー、2 位のバスケットボールに次いで 3 位に認識されていた。ラグビーは、ルーマニアでは今も、イングランドでラグビーが発祥した当時と同じ男性イメージをもつスポーツであることが認められた。

<引用文献>

原英子

2014 「岩手県のラグビー(2)」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』16, 37-42

2016 「子どもがラグビーをはじめるとき—台湾台北市でラグビーをする小学生へのアンケート調査結果—」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』18, 73-78

- 2019a 「女子ラグビーから見えてきたこと」『月刊 みんなく 特集 ラグビーという文化』
11月号 通巻506号 編集・発行 国立民族学博物館 6-7
- 2019b 「台湾の近代スポーツの歴史——文化人類学的視点によるラグビーとエスニシティ
の問題を中心に——」(スポーツ史学会編『スポーツ史学会第33回大会』発表抄
録 30-31
- 2019c 「台湾原住民とスポーツ——台湾ラグビーと原住民とさんさ踊り——」日本順益台湾
原住民研究会編『台湾原住民研究』23 178-183 頁

Eiko HARA

- 2017 How Survivor Have Overcome Trauma from the Great East Japan Earthquake:
Shamanic Rites to Bid Farewell to Loved Ones and Creating Public Works
Symbols of Rugby World Cup in 2019. *Cross Boundaries in Culture and
Communication* 8-1, Journal of the Department of Foreign Languages, Romanian-
American University, Bucharest 115-123
- 2018 Why and How Are Women Recruited for Rugby? The Case in Japan. *Cross
Boundaries in Culture and Communication* 9-1, Journal of the Department of
Foreign Languages, Romanian-American University, Bucharest 49-57
- 2019 Changing Images of Gender in Sports: Comparative Gender Images in Romania
and Japan. *Cross Boundaries in Culture and Communication* 10-1, Journal of the
Department of Foreign Languages, Romanian-American University, Bucharest,
67-74

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 Eiko HARA | 4. 巻 9-1 |
| 2. 論文標題 Why and How Are Women Recruited for Rugby?: The Case in Japan | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Romanian-American University, Crossing Boundaries in Culture and Communication | 6. 最初と最後の頁 48-56 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 Eiko HARA | 4. 巻 8-1 |
| 2. 論文標題 How Survivor Have Overcome Trauma from the Great East Japan Earthquake: Shamanic Rites to Bid Farewell to Loved Ones and Creating Public Works Symbols of Rugby World Cup in 2019 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 Romanian-American University, Crossing Boundaries in Culture and Communication | 6. 最初と最後の頁 115-123 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|---------------------------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 原英子 | 4. 巻 18-1 |
| 2. 論文標題 「子どもがラグビーを始めるとき 台湾台北市でラグビーをする小学生へのアンケート調査結果」 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 | 6. 最初と最後の頁 73-78 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 Eiko HARA | 4. 巻 10-1 |
| 2. 論文標題 Changing Images of Gender in Sports: Comparative Gender Images in Romania and Japan | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 Romanian-American University, Crossing Boundaries in Culture and Communication | 6. 最初と最後の頁 67-74 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|----------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 原 英子 | 4. 巻 23 |
| 2. 論文標題 台湾原住民とスポーツー台湾ラグビーと原住民とさんさ踊り | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 台湾原住民研究会編『台湾原住民研究』 | 6. 最初と最後の頁 178-183 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|-------------------------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 原 英子 | 4. 巻 第33回大会 |
| 2. 論文標題 台湾の近代スポーツの歴史 文化人類学的視点によるラグビーとエスニシティの問題を中心に | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 スポーツ史学会編『スポーツ史学会第33回大会』発表抄録 | 6. 最初と最後の頁 30-31 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|-----------------------------------------|-------------------|
| 1. 著者名 原 英子 | 4. 巻 11月号 |
| 2. 論文標題 女子ラグビーから見えてきたこと | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『月刊 みんぱく 特集ラグビーという文化』国立民族学博物館 | 6. 最初と最後の頁 6-7 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 1件/うち国際学会 4件)

| |
|--------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 Eiko HARA |
| 2. 発表標題 Why and How do Women Begin to Play Rugby in Japan |
| 3. 学会等名 Crossing Boundaries in Culture and Communication (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 Eiko Hara |
| 2. 発表標題 How Surviving Families Communicate with the Dead since the Great East Japan Earthquake in 2011: Japanese Shaman Itakos' Ceremonial Religious Activities as Grief Care |
| 3. 学会等名 The 6th edition of the scientific conference, "CROSSING BOUNDARIES IN CULTURE AND COMMUNICATION", Bucharest, Romania, 19 May 2017. (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 Eiko HARA |
| 2. 発表標題 Changing Images of Gender in Sports:Comparative Gender Images with Romanians and Japanese |
| 3. 学会等名 The 8th international conference, Crossing Boundaries in Culture and Communication in Bucharest, Romania (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 Eiko Hara KUSABA |
| 2. 発表標題 Changing Images of Gender in Sports: The Case of Women's Rugby in Japan |
| 3. 学会等名 IUAES(the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) 2019 Inter Congress in Poznan, Poland (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 原 英子 |
| 2. 発表標題 台湾の近代スポーツの歴史 文化人類学的視点によるラグビーとエスニシティの問題を中心に |
| 3. 学会等名 スポーツ史学会第33回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|